

0 日目

相変わらず目覚めは最悪で、今ここで微睡んでいる事すら後悔してしまうほどだった。もう一度眠りにつこう。そう思ってベッドに潜ってみたものの、あれだけ寝ていたのだ。当然、眠れる訳がなかった。

ずっと太陽から逃げ続けていた僕にとっては、寝ているのも起きているのも変わらない。強いて言うならそこに意識があるか否か。それだけが違っている。いや、本当はそれすらも変わらないのかもしれない。なぜなら僕は、ずっと。

いつからここに居るのだろう。いつまでここに居られるのだろう。そんな事すら分からないほど途方もない時間をこの空間の中で過ごした。変わり映えのない日常。それを変える事のできない自分。僕は何もかもを好きになれなかった。

いっそカタストロフィが全てを壊してしまうなら、それもいいかもしれない。すべて跡形も無くなってしまったら僕と、彼女の抱える罪も消えるだろうか。

(ドアが開く音)

ニア

「ただいま。…ってまた寝たふりしてる。どうせバレるんだからそれ、やめてくれない？」

声のする方を見やると、そこにはいつにも増して疲れ切った表情のニアが立っていた。蔑むような凍てつく視線が嫌で、僕は彼女から目を背ける。静寂が、やけに鮮明に聞こえた。

ニア

「…ったく、こっち向けっての！もう！」

彼女は勢いよく僕の殻を剥いだ。

ニア

「こんな暗い部屋で寝っ転がってるからそんな性格になったんじゃない？せめてカーテンくらい開けなさいよ！」

ニアが何の躊躇いもなくカーテンを開けると、部屋いっぱい懐かしい光が差し込んできた。

僕がその眩しさに目を細めていると、彼女は大きなため息をついた。

ニア

「…ったく、久々に顔見にきてやったのに、何か変わってるかと思ったら全然変わってない。タウってば、成長ってものを知らないの？本当あなたって人は…」

タウ

「で、何しに来たの？」

面倒くさかったので続きを遮るようにして、言った。

ニア

「今日が、最後だから。ちょっとタウの顔が見たかっただけ」

タウ

「…」

ニア

「タウも知ってるでしょ？カタストロフィ。あれ、また始まるみたいだから。私、Woodにずっと居なくちゃいけないんだよね。もう帰る暇も無いっていうか。だから…」

タウ

「Wood?何それ。そんな話、一度も聞いた事なかった。」

ニア

「カタストロフィに対抗する、唯一の組織。対抗する…って言っても、どうにもならないんだろうけど」

タウ

「だったら…。だったら、ずっとここに居ればいいじゃないか！幸い、僕らイデアは何も食べなくても生きていける。なのになぜ、危険を冒してまでそんな事を…」

ニア

「戦わなくちゃいけない理由が出来たから。今度は誰かの意思じゃない。私自身の意思で戦ってる」

タウ

「別にニアじゃなくたっていいのに。大体、これまで散々戦って傷ついてきたのに、これ以

上ニアが傷つく必要なんてないよ！」

ニア

「でも、誰かがやらなきゃいけない。これは人間の力だけではどうにもならない事なの。タウならよく知ってるでしょ？私達アイデアだけしか、アレを操る事ができない。もちろん普通の兵器だってあるにはあったんだけど…」

その言葉の続きを、僕は察する事ができた。嫌というほど聞こえていた騒音の類は、いつしか鳴りを潜めていた。

ニア

「そういえば、預かってきたものがあるんだった。はいこれ。一応、上からの命令だから」

ニアから差し出されたのは、色のついた封筒だった。

タウ

「…何これ」

ニア

「招待状。三島司令から預かってきたの。どうせ寝っ転がってるだけで何もしないんだったら、ちょっとは人様のお役に立ったらどう？」

タウ

「三島司令って、あの三島司令？」

ニア

「そう、あの三島司令。今は Wood の司令官やってるけど」

三島トウジ。彼は戦後唯一僕らアイデアを擁護した人物だった。もっとも、僕らを戦争に駆り出したのは他にもない、彼だったのだけど。

タウ

「今更何を…。まさか、また戦えなんていうつもりじゃないよね？」

ニア

「そう。そのまさか。三島司令がいうには、最終作戦のための人員が足りないんだって。そ

れも、あと1人」

タウ

「よりによって、なんで僕が…」

ニア

「さあ？よっぽど人員が足りないんじゃない？まさに猫の手も借りたいってやつ。もっとも、今のタウを見てると猫の方がよっぽどマシに見えるけど」

タウ

「そんな言い方ないだろ！？」

ニア

「だって、事実じゃない。どうせ今のタウには戦う度胸なんてどこにもないもんね。…ったく、よりによってなんでこいつなんだか」

タウ

「久しぶりに帰って来たと思ったら嫌味ばっかり。もう帰ってよ。せめて残り少ない明日を、有意義に過ごしたいからさ」

ニア

「何その言い方。イラッとするんだけど」

タウ

「今まで散々言いたい放題言われてきたんだから、ちょっとくらいいいだろ？」

ニア

「私だって言いたくて言ってるんじゃないよ！私だって最初の頃はタウと一緒に過ごせて幸せだったよ？でもそれ以上に我慢しなきゃいけない事が多くなって、好きでいる時間より嫌いでいる時間の方が長くなっちゃって…。正直、どうすればいいのかわからないよ」

タウ

「だったら、好きにすればいいだろ！大体いつもいつもここに来る事自体、鬱陶しいんだよ！そもそも僕はニアと一緒に居たいだなんて一度も言った事もない。そっちが勝手に付きまとってるだけだ。僕はこんな事望んでない」

ニア

「…ふーん、そういう事言うんだ。私がどれだけタウのために頑張ってきたか、考えた事ある？ あなたはいつだってそう。散々周りの人に気を使わせておいて、それを顧みる事なんて一度もない。

…私途中で気づいたの。あなたは1人では何にも出来ない人だって。だから私、出来るだけタウのためになるようにって色々と根回しもしてきた。それなのにそんな事言われるんじゃ、私だってそりゃ怒りたくもなるよ」

タウ

「そんなに怒りたきゃ、どこかへ行けばいいだろ！もううんざりなんだよ！そういう恩着せがましいところも、そうやって怒られるのも！」

ニア

「もううんざり。偉そうな口きける余裕があるんだったら、Wood にでもなんにでも行けばいいんじゃないの？ どうせする事もないんだったら、そっちの方がまだいくらかマシでしょ」

タウ

「…分かったよ。行けばいいんだろ行けば！また戦って、誰かを殺して、それでみんなに非難される。…いいよもう。僕らアイデアは、元々そのためだけに産まれてきたんだから」

ニア

「面倒くさい。こんな事なら帰らなきゃ良かった。最後だからってわざわざ顔見にきてやったのに、結局何も変わってなかった。それに何？その投げやりな態度。そんな意識で Wood に入られても、こっちが迷惑するだけなんだけど。どうせまた、いつもみたいに何もしないか、途中で投げ出すかのどっちかなんでしょ？それなら最初から、何もしない方がマシよ」

タウ

「僕は変わったんだよ！僕は僕の意味で、何もしないって決めたんだ！」

ニア

「何それ、ダサ。それに家から出ず、何にもせずはどうやって変わるっていうのよ？そんなに変われるなら、誰も苦労はしない。…いや、変わったのか。以前のタウはもっとカッコよかった。私を助けてくれた時のあなたはどこへ行ったの？こんな事になるんだったら、好きになるんじゃなかった…」

タウ

「勝手に好きになられて嫌いになられて、こっちはいい迷惑だよ！ニアを助けたのだって気まぐれでしかない。そもそも僕らは戦場で多くの人やアイデアを見捨てたり、殺してきたじゃないか！別に助けようと思って助けた訳じゃない！」

ニア

「…呆れた。で？」

タウ

「…むしろ、僕達アイデアはあの時死んでおくべきだった。僕も、ニアも。みんな1人残らずこの世から去っておくべきだったんだ。僕らの居場所はここじゃない。いや、そんなものどこにもないんだ…」

ニア

「ごちゃごちゃごちゃごちゃうるさい！そんなに死にたきゃ今すぐにでも死ねばいいじゃない！死ねないから生きてるんでしょ？どうせ生きるんだったら、せめて胸張って生きてるって言いなさいよ！…そんな嫌そうに生きられたら、こっちだってイライラすんのよ」

タウ

「僕だって、生きたくて生きてる訳じゃないのに…」

ニア

「でも、生きてるのには変わらない。下らない言い訳考えるくらいだったらもうちょっとマシな生きる理由、考えなさいよ」

タウ

「…」

ニア

「…明日の朝、もう一度だけ聞くから。Woodに行くのか、行かないのか。それまで頭冷やして考えといて。明日早いからもう寝るね？じゃ、おやすみ」

そう言って、ニアはドアの向こうに消えた。静かにドアが閉まるのを、僕はただぼんやりと見ていた。

